

「く出す」を伴う複合動詞の受動形

土 屋 博 嗣

はじめに

語構成について調べているうちに、次のような文に出会った。

まずこれは、戦後、ここにこの数年間、漢字制限の動きなどにつれて盛んに行われ出した、かな書きの純日本語による造語（たとえば、「わたり音」など）と、その軌を一にすると言うことができるだろう。（「語構成序説」阪倉篤義）

問題の個所は連体修飾句に入っているので、叙述の文に直してみると、

純日本語による造語が行われ出した。

となる。

複合動詞の受動形を作るのには、前項動詞と後項動詞とを合わせた複合動詞全体に「く(ら)れる」を付けるのに、ここでは「前項動詞+(ら)れ+後項動詞」と前項動詞だけに「(ら)れる」を付けた形態が用いられている。

語は語構成の観点から單純語と合成語とに分けられる。複合語とは、この合成語の一部であり、接辭を付けて語となる派生語と合わせて合成語を構成している。複合語はその時代の語構成意識をもつて二語以上の語の結合によると考えられる語であり、語源意識を必要としない語である。この單純語・合成語（派生語＋複合語）という概念はあくまでも語の内部の要素を考えたときに導き出されるものであり、語を越えるものではない。

したがって、複合動詞の受動形は一語の未然形に助動詞「はれる」を付けることによって、純日本語による造語が行い出された。

としなければならない。この文も明らかに間違いだとは言えないが、やはり原文の方が自然に思える。本稿ではこの複合動詞の受動形を、「く出す」を例として検討しようとするものである。

一

はじめに、受動文にはどのような型があるかを見ておきたい。

鈴木（一九七二）によれば

①直接対象の受身

さち子が二郎になぐられた。

②相手の受身

花子は太郎に算数を教えられた。

③持ち主の受身

太郎がスリにさいふをすられた。

④ 第三者の受身

ぼくは雨に降られた。

と、四種に分類されている。また、『現代語の助詞・助動詞』（国立国語研究所）の助動詞「れる」「られる」の項には「①受身の意味を表す」として

(イ) 動作・作用の直接的受身。

四国外相会議はバリで開かれる。

(ロ) 動作・作用の間接的受身。

あだ名をつけられる。

内緒ごとを見られた。

(ハ) 動作・作用の利害関係（迷惑の場合が多い）に関する受身。

子供に死なれる。

三種に分けられている。鈴木②③が一緒にされて、(ロ)となっているため、国研のもののほうが種類が少なくなっている。ここでは鈴木②の分類に従って考えていく。

①は能動文の他動詞の目的語が受動文の主語となり、能動文の主語が受動文の動作主となって、能動文と受動文とが対応している型である。

AがBに殺された。↑BがAを殺した。

太郎が先生にほめられた。↑先生は太郎をほめた。

次郎は車にひかれた。↑車が次郎をひいた。

次のような能動文で対象としてニ格をとる動詞のものもここに入れてよいと思われる。

わたしは犬にかみつかれた。↑犬はわたしにかみついた。

以上の四例はすべてその主語が有情物であったが、非情物を主語とするものも多い。

このごろ漫画がよく読まれている。↑(人々は) このごろ漫画をよく読んでいます。

この本はまだ発売されていない。↑(人々は) この本をまだ発売していない。

これらも不特定の動作主を設定することによって能動文に変換しうる。

②は能動文の目的語はそのまま目的語として受動文に残るが、能動文で相手であった者が主語となり、能動文の主語が受動文の動作主となって、能動文と受動文の対応があるものである。

AはBに(から) 仕事を頼まれた。↑BはAに仕事を頼んだ。

わたしは父に(から) 時計を贈られた。↑父はわたしに時計を贈った。

この文の目的語を受動文の主語とすれば、

この時計は父からわたしに贈られたのです。

となるが、この文は①の型の受動文である。

③は②と同じく目的語は受動文にあるが、受動文の主語は能動文には表現されていないものであり、この型の受動文を能動文に変換することはできない。

わたしは隣の人に足を踏まれた。↑隣の人は(わたしの)足を踏んだ。

わたしは母に手紙を読まれた。↑母は(わたしの)手紙を読んだ。

④は③と同じく能動文に変換できないものである。動詞は自動詞であり、受動文の動作主は自動詞の主語である。

ぼくは雨に降られた。↑雨が降った。

わたしは友達に來られて、勉強できなかった。↑友達が來て、わたしは勉強できなかった。

この④は自動詞でも受動文を作ることができるということで、日本語の受動文の特徴としてよく指摘されるところである。しかし、すべての自動詞が受動文が作れるわけではない。例えば

*わたしは信号に赤に変わられた。↑信号が赤に変わった。

*雑草に伸びられた。↑雑草が伸びた。

*花瓶に落ちられた。↑花瓶が落ちた。

など、よく指摘される、可能・状態を表す「できる」「ある」などの自動詞ばかりでなく、非情物を主語とし、自然発生的な動作を表す自動詞は受身にはできない。つまり、非情物で動作主とできるものは、雨・風などの自然現象、自動車・機械など背後に有情物のあるものなどであり、これらを除けば、基本的には有情物を動作主とした受身であると考えてよい。

③④は受動文の主語になっている者(多くの場合は第一人称)が被害を受けているという感情を表しているということで、「被害(迷惑)の受身」と言われている。

仲人に手を取られて、花嫁は退室した。

など、この受動文には受益のものもあるが、数は少ない。

また、被害ではなく、受益を表すには同じ格関係で、「くてもらう」が使われる。

わたしはきのう友達に來られて、本が読めなかった。

わたしはきのう友達に來てもらって、楽しく過ごした。

「來られる」は友達が勝手に來るのであり、「來てもらう」は主語である「わたし」の意志を反映していることが多い。

①②は能動文との対応関係があり、主語が受動形で表される動作の直接的影響を受ける受動文ということで「直接受動文」ともいい、また、③④は能動文との対応関係がなく、主語が受動形で表される動作の間接的な影響を受ける受動文ということで「間接受動文」とも言う。『現代語の助詞・助動詞』では、「くがくをくられる」という文型に引きずられて②③を同一項で扱っているが、②の動作主は「に・から」の両方で表すことができるが、③は「に」のみで「から」は使えないというところからも、②③を同一項にするのには無理があると考える。

間接受動文が被害を受けるという感情を表すことは見解の一致しているところであるが、直接受動文が被害の感情を含んでいるか否かについては見解が分かれている。動作を受ける直接受動文の主語が非情物の時は客觀的事実の表現であることは一致しているが、主語が有情物の時、被害の感情が直接受動文に表現されているかという問題である。井上（一九八三）では

戸がはげしくたたかれた。

子供がはげしくたたかれた。

と例をあげ、主語が有情物の時には被害をこうむったという意味が含まれている、としている。これに対し、奥津（一九八三）は、「枕草子」「徒然草」の受動文を調査したなかで、直接受動文の有情物を主語としたものの中にも中立の意味の例が多くあり、「ちごが人にいだから」「人にさそわる」など）、また、「人にわらわる」「病に犯さる」なども表されている事柄から話し手、聞き手が感じとる主観的解釈ではないか。事柄は同一であるが、能動文・受動文が選択されるのは視点の置き方による、としている。私も、

わたしは友達に映画にさそわれた。

わたしは父に「ちび」と呼ばれている。

母に頼まれた用事を忘れた。

など、直接受動文は有情物を主語にしても、事実の表現であり、そこには利害の感情が含まれていないと考える。

つまり、日本語の受動文には利害の感情を含まない直接受動文と、利害の感情を含む間接受動文がある。直接受動文とは能動文の動詞の直接目的語あるいは相手である間接目的語を主語とした受動文であり、間接受動文とは能動文との対応関係のない受動文である。

このように今まで日本語の受動文について細かく検討して来たのは、複合動詞の受動文を考えるにあたって、受動文についての私の意見を明らかにし、また、複合動詞の受動文の構造を決定する要因として、受動文の種類が関係しているのではないかと考えたからである。

次に、複合動詞の後項動詞「く出す」について検討する。「く出す」には大きく分けて二つの意味がある。

一、「内から外へ」という方向を表す。

(水が) 流れ出す、(子供が) 飛び出す、(部屋から人を) 押し出す、(リストから名前を) 書き出す

二、「始める」「始まる」などの開始を表す。

(雨が) 降り出す、(子供が) 泣き出す、(酒を) 飲み出す、(手紙を) 書き出す

双方に「書き出す」が入っているところからも分かるように、文脈によって方向になったり、開始になったりする。また、一と二の中間的な意味として「作り出す」「考え出す」「描き出す」などを「作成」としてあげているものもあるが、「内から外へ」という方向に作用があった結果、その結果が存在しているという点だけが異なるだけであり、この「作成」は「方向」に入れ、基本的には二種に分けうると考える。

二の開始の意味では自動詞的用法と他動詞的用法とがある。自動詞的用法とは「くが始まる」と言えるもので、「雨が降り出す」は「雨が降るといふ事態が開始する」であり、「日本語が分かり出す」は「日本語が分かるといふ事態が開始する」であるように、自然発生的な事態の開始を表す用法をさす。他動詞的用法とはこれに対し、「酒を飲み出す」は「酒を飲むという行為を開始する」、「手紙を書き出す」は「手紙を書くという行為を開始する」というように、意志的な行為の開始を表す用法である。「降る」「分かる」は非意志的な動作であるので、意志的な行為の開始を表す「く出す」の他動詞的用法は存在しない。しかし、「手紙を書き出す」や「酒を飲み出す」は他動詞的用法と

ともに、自動詞的用法も存在しうる。これは「雨が降り出す」と同じように、「手紙を書く」という事態が開始する」とも言えるからである。つまり、「雨が降り出す」のような意志でコントロールできない事象は自動詞的用法だけであるが、「手紙を書き出す」の意味的構造には自動詞的用法と他動詞的用法との二つがあり、文脈によってどちらかに決定されるのである。

開始の意味にはこれとは別に、前項動詞の意味特性によって、複数の行為・事態の開始か、単数の行為・事態の開始か、あるいはその双方であるかの違いがある。例えば、「くっている」を付けると、変化の結果の継続を表す瞬間動詞である「消える」に「く出す」が付くと、

ろうそくの火が消え出した。

のように、「消える」という変化にはその過程が存在せず、単数の事態の開始を表すには「消えかける」（消える直前を表す）とは言えても、「消え出す」とは言えない。「消える」は「消えかける」「消えた」「消えている」となる変化動詞であり、「消え出す」と言えるのは複数のろうそくがあり、風が吹いたり、空気が足りなくなったりして、順次ろうそくが消えて行く過程の開始を述べた時である。

しかし、同じ瞬間動詞と言われているものでも変化の過程を持つものもある。

木が倒れている。

例えば、普通は地面に横たわっている木を述べたものであるが、この「倒れる」に「く出す」を付けると、

木が倒れ出した。

となり、複数の木が次々と倒れて行く過程ばかりでなく、一本の木が風に吹かれて傾き始めるという意味をも表す。

「ゝている」を付けて、動作の継続を表す継続動詞である「泣く」に「ゝ出す」を付けると、

子供が泣き出した。

となり、これは他の状況を限定する修飾語が付かなければ、単数の動作の過程の開始を意味する。「泣く」は「泣き出す」「泣いている」「泣いた」となる動作動詞であり、瞬間動詞が「ゝた」↓「ゝている」となるのに対し、「ゝている」↓「ゝた」となる継続動詞である。しかし、この「泣き出す」も「次々と」など複数を明示する表現があれば、複数の事態の開始を表す。つまり、この瞬間動詞・継続動詞の分類は語の通常の使われ方をした時の一般的傾向としての分類である。

工藤（一九八二）によると、「登る」は瞬間動詞的側面と継続動詞的側面を持っている。

① 山道を登っている。

② 木の上に登っている。

①は通過する場所を示す「を」をとり、動作の継続を表し、②は物が存在する場所を示す「に」をとり、変化の結果の状態を表している、としている。この「登る」に「ゝ出す」を付けると、

③ 山道を登り出した。

④ 木の上に登り出した。

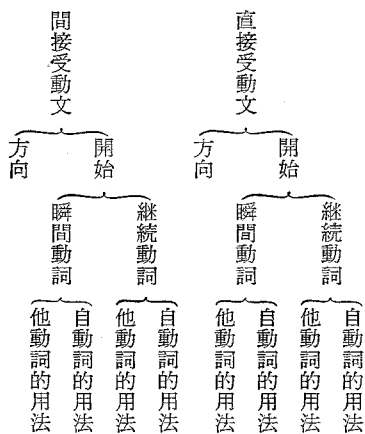
となり、③が単数の、④が複数の事態の過程の開始を意味する（「に」は到達点ではなく、存在する場所を表している）と解釈するのが妥当であろう。つまり、一般的な傾向としては、継続動詞に「ゝ出す」が付くと、単数の事態の開始を表し、瞬間動詞に「ゝ出す」が付くと、複数の事態の開始を表す。

三

前二節の考察から、後項動詞に「～出す」をとる複合動詞の受動文の検討には次の項目を考えに入れればよいことになる。

- 一、直接受動文か間接受動文か。
- 二、「～出す」の意味は方向か開始か。
- 三、前項動詞は瞬間動詞か継続動詞か。
- 四、「～出す」の用法は自動詞的用法か他動詞的用法か。

表で表すと次のようになる。



これらの場合について順次検討していくことにする。

まず、方向を表す「～出す」であるが、表でも示されていないように、瞬間・継続動詞の使い分けについては触れられていない。「流れ出す (flow out)」「押し出す (push out)」のように方向を表す部分は英語では前置詞で表されているように、方向の「～出す」は意味的な独立性が少なく、動きの方向を表すものであるから、ある程度の動きの過程を要する継続動詞にしか付きえず、瞬間動詞には付かない。

(1) a 部屋から客を追い出した。

b 客が部屋から追い出された。

c * 客が部屋から追われ出した。

(2) a 角から子供が飛び出したので、わたしは急ブレーキをかけた。

b わたしは角から子供に飛び出されて、急ブレーキをかけた。

c * わたしは角から子供に飛ばれ出して、急ブレーキをかけた。

(1) b c は (1) a の直接受動文、(2) b c は (2) a の間接受動文であるが、(1) c、(2) c の「～(られ)出す」は言えない。常に複合動詞全体に「～(られ)る」が付けられている。これは方向を表す「～出す」が前項動詞との結合度が高いからであると思われる。

同じような複合動詞後項動詞には「だす (外向)」「のほかに、～あう (相互)」「～かける (対向)」「～かえす (反向)」「～つく (付着)」「～こむ (内向)」「～あがる (上向)」などがある。

(3) この会議では経済問題が話し合われた。

(4) わたしは山田さんに話しかけられた。

(5) 手紙が送りがえされてきた。

(6) わたしは犬に足をかみつかれた。

(7) わたしは泥棒に忍びこまれて、金を取られた。

(8) 映画館で前の人に立ちあがられた。

(3)(4)(5)は直接受動文、(6)(7)(8)は間接受動文である。

次に直接受動文の開始の意味で前項が意志動詞であり、継続動詞であるものについて検討する。

(9) a 太郎が次郎をなぐり出した。

b 次郎が太郎になぐり出された。

c 次郎が太郎になぐられ出した。

(9) a には前項が動詞の動作主によってコントロールできる意志動詞であるので、自動詞的用法と他動詞的用法との二通りの意味的構造がある。

a ① (太郎が(次郎をなぐり)出した。)

② (太郎が次郎をなぐり)出した。

①は「く出す」の他動詞的用法であり、「太郎が次郎をなぐることを開始した」と解釈でき、②は自動詞的用法であり、「太郎が次郎をなぐるものが開始した」と解釈できる。①の受動文がbであり、②の受動文がcである。従って、①の「なぐり出す」は「なぐる」が意志動詞であるので、なぐることを太郎の意志で開始し、継続動詞であるので、

単数の動作の開始であることを意味的に持っている。bの「なぐり出される」はこの「なぐり出す」が受動形になった文であるため、bは個別的な事態を描写した、臨場感を持った受動文になっている。この受動文にふさわしい修飾語は「今日」「わたしが見ていると」「話し合っているうちに」などである。

②の「なぐり出す」は「く出す」が自動詞的用法になっており、他動詞的用法に比べ一般性がある。一般的な事態の開始を述べている。これを受動文にしたcの「なぐられ出す」は「次郎が太郎になぐられることが開始した」と解釈できるように、自分とはあまり関係のない事態を描写したような客観的な受動文になっている。そのためこの受動文は動作主、受動者が不特定である場合に使われやすい。

(10) この学校では五年ほど前から先生が生徒になぐられ出した。

また、反復されている事態が背後にあるので、一般的事態の開始と言えるわけで、「このごろ」「一年前から」などの修飾語が付きやすい。

(11) a 学生がこの本を読み出した。

b この本は学生に読み出された。

c この本は学生に読まれ出した。

(11)についても(9)と同様の使い分けがなされている。(9)は受動者が有情物(次郎)であるのに対し、(11)では無情物(この本)になっている。また、動作主も一般的な表現である「学生」を使っているので、この文脈ではcの「読まれ出した」の方がbより適格性が高く感じられる。このcのような型の文は動作主が不特定であるために文中に表現されない報道文などによく使われる。

(12) 軍事力の増強が声高に叫ばれ出した。

(13) 働く女性の権利が尊重され出した。

直接受動文で、前項が意志動詞であり、瞬間動詞であるものには「知り出す」「はき出す」がある。

(14) a 世界が日本を知り出したのは最近だ。

b 日本が世界に知り出されたのは最近だ。

c 日本が世界に知られ出したのは最近だ。

(15) a 一段と冷え込み、街行く女性はブーツをはき出した。

b ブーツがはき出された。

c ブーツがはかれ出した。

前項が意志動詞であるので、自動詞的、他動詞的の両用法がある。bは他動詞的用法の受動文で、cは自動詞的用法の受動文である。ここで注意しなければならないことは、「知る」が過程を持たない、変化を表す動詞であることである。「知っている」とは決して知りつつある過程を表すのではなく、「知った」結果存在している状態である。故にaの「知り出す」は単数の事態の開始を表すのではなく、複数の「知る」ようになるという事態が順次発生する過程の開始である。そしてこの複数の事態の開始を一連の個別的な事態と把握すれば、他動詞的な用法が生かされ、「知り出される」となり、この複数の事態の開始を一般的な事態と把握すれば、「知られ出す」が使われる。私の語感ではcの「知られ出す」の方がbより若干適格性が高く感じられるが、これは直接受動文は受動文の主語に焦点を当てた客観的な事実の描写であり、それがcを受け入れやすくしているのであろう。

間接受動文で、前項が意志動詞であり、継続動詞であるものには「泣き出す」がある。

(16) a 夜子供が泣き出した。

b 夜子供に泣き出された。

c 夜子供に泣かれ出した。

(16) bは他動詞の用法から導き出されているので、「子供が泣き出す」ことに対して切実な迷惑の感情が表現されている。cは自動詞的用法から来ているので、迷惑の感情にも距離を置いた余裕が感じられる。

(17) きのはもっと酒が飲みたかったが、山田に先に飯を食べ出されて、酒が飲めなくなってしまった。

(17)は個別的な事態の開始を表しているので、「食べ出されて」としかならない。cは今まで泣いていなかったのが、子供が泣き出すようになって困っていると、一般的事実として述べているのである。

間接受動文で、前項が非意志動詞であり、継続動詞であるものには「降り出す」がある。

(18) a 雨が降り出した。

b 雨に降り出された。

c 雨に降られ出した。

bとcだけを見たときはどちらが適格性が高いかは分からないが、「朝天気がよかったので、ピクニックに出掛けたが、途中で雨が降り出して困った」という場合は、bの「途中で雨に降り出されて」となるであろう。cとなるのは「旅行するたびに雨に降られることが多くなった」というような場合である。そしてbは「降る」が継続動詞であるため、単数の事態の開始であることからもうなずける。

間接受動文で、前項が意志動詞であり、瞬間動詞であるものには「行き出す」がある。

(19) a 息子がデイスコに行き出した。

b 息子にデイスコに行き出された。

c 息子にデイスコに行かれ出した。

「行く」は瞬間動詞であるため、「行き出す」は複数の事態の開始を意味するが、本人の意志で「行き出した」わけであり、他動詞の用法であるので、bの「行き出された」は個別的な切実な迷惑の感情を表している。cは「～出す」の自動詞的用法から導かれ、一般的な迷惑の事態の叙述となる。

(20) 父の牧場では伝染病で次々に牛に死に出されている。

(20)では別に意志を持って死のうとしているわけではないであろうが、一般化して述べられない切実さが他動詞的用法の「死に出される」を使わせているのであろう。「死なれ出す」にすると一步距離ができる感じである。

間接受動文で、前項が非意志動詞であり、瞬間動詞であるものには「寝込み出す」「着き出す」がある。

(21) a わたしの祖父は寝込み出した。

b わたしは祖父に寝込み出された。

c わたしは祖父に寝込まれ出した。

(22) a 早々と客が着き出した。

b 早々と客に着き出された。

c 早々と客に着かれ出した。

(21)(22)とも適格性ではbの方がcより若干高いと思われる。(21)(22)aの「く出す」は前項が非意志動詞であるので、自動詞的用法だけである。また、瞬間動詞であるので、迷惑だと感じる複数の事態の開始を意味する。つまり、すでにaの能動文の段階で一般的な、複数の事態の開始であることが明らかにされているわけで、それを受動形にしたb、cは意味的には同じである。bの文に適格性を多く与えたのは、間接受動文であるためだと思われる。

おわりに

「く出す」の受動形は今まで見たように、どちらとも決定的には決められないが、細かく文脈を設定することによって、若干の適格性の差があることを見てきた。私は当初先にあげた四つの要因で受動形がどちらが適格か大方決定できると考えた。今後は、これらの要因の序列を考えに入れ、要因が衝突したときどちらが優先するかなどを、多くのインフォーマントと資料に当たりながら考えてみたい。

参考文献

- 井上和子(一九七六)『変形文法と日本語・上』大修館書店
奥津敬一郎(一九八三)「何故受身か」『国語学』一三二号
工藤真由美(一九八二)「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』一卷二号
久野暉(一九七二)『日本文法研究』大修館書店
——(一九七八)「複合動詞の敬語形」『日本語教育』三五号
国立国語研究所(一九五一)『現代語の助詞・助動詞』秀英出版
阪倉篤義(一九五七)「語構成序説」『日本文法講座』第一巻 明治書院

- 柴谷方良（一九七八）『日本語の分析』大修館書店
鈴木重幸（一九七二）『日本語文法・形態論』麦書房
関 一雄（一九七七）『国語複合動詞の研究』笠間書院
寺村秀夫（一九八二）『日本語のシンタックスと意味Ⅰ』くろしお出版
森田良行（一九七三）『受身・使役の言い方』『講座日本語教育』第九分冊
——（一九七八）『日本語の複合動詞について』『講座日本語教育』第十四分冊
吉川武時（一九七六）『現代日本語動詞のアスペクトの研究』『日本語動詞のアスペクト』麦書房